



エキュメニカル運動におけるバプテスマ理解と相互承認に関する一考察：WCC信仰職制委員会およびローマ・カトリック教会との関連で

著者	小林 和代
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028202

氏名	小林 和代
学位の専攻分野の名称	博士（神学）
学位記番号	甲神第13号（文部科学省への報告番号甲第679号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2019年2月27日
学位論文題目	エキュメニカル運動におけるバプテスマ理解と相互承認に関する一考察 —WCC信仰職制委員会およびローマ・カトリック教会との関連で—
論文審査委員	（主査）教授 中道 基夫 （副査）教授 水野 隆一 小田 武彦（聖マリアンナ医科大学特任教授）

論文内容の要旨

請求論文は、およそ90年にわたって WCC ならびにローマ・カトリック教会、さらに各教会間で行われたバプテスマをめぐる争点と合意点、バプテスマの相互承認の重要性と課題を明確にすることを目的としている。その際、信仰職制世界会議・信仰職制委員会の報告書・研究書、教会間対話文書・声明文、ローマ・カトリック教会の公文書などの資料を比較、検討、解釈する方法としてエキュメニカル解釈学を用いている。エキュメニカル解釈学とは、様々な教会において受け継がれ、形成されてきた伝統の解釈と教会間における受容に焦点を当て、教会間対話において相互の伝統を理解し、教会の一致を目指すための解釈学である。

第1章では、第1回信仰職制世界会議（1927）から第4回信仰職制世界会議（1963）におけるバプテスマをめぐる教会間の理解の変遷をたどり、プロテスタント教会におけるバプテスマの理解と執行の合意点を整理している。WCCの動向とローマ・カトリック教会の第二バチカン公会議における議論を分析し、ローマ・カトリック教会におけるバプテスマの教義に対する新しい解釈を明らかにしている。

第2章では、WCCの『アクラ文書』（1974）、『リマ文書』（1982）におけるバプテスマ理解を考察している。特に『リマ文書』におけるキリスト論的、倫理的、聖霊論的、教会論的、終末論的なバプテスマ理解とともに、教会の一致におけるバプテスマを巡る争点を明示している。さらに、『アクラ文書』に対するローマ・カトリック神学者による応答が紹介され、エキュメニカル運動におけるバプテスマの議論に対するローマ・カトリック教会の貢献を論じている。

第3章では、『リマ文書』から『一つのバプテスマ』（2011）に至るまでのおよそ30年間に行われたバプテスマの相互承認を目指す議論の進展をたどっている。その議論の中で、バプテスマとコイノニアとの関係の再評価が、幼児や知的障がい者のバプテスマをめぐる問題を解決する根拠になった経緯を明らかにしている。さらに、「バプテスマの相互承認を話し合う際の基準は何か」が討議されたファヴェルジュ協議会（1997）の分析を通してバプテスマの執行形態の多様性とそれを認める基準などバプテスマのインカルチュレーションの問題にも言及している。そして、『一つのバプテスマ』を分析することを通してバプテスマの相互承認を巡る7項目の争点とその受容の可能性を明確にしている。

第4章では、バプテスマの相互承認をめぐるなされたローマ・カトリック教会と正教会、改革派教会世界連盟、聖公会、世界メソジスト連盟、ルーテル世界連盟、バプテスト世界連盟との2教会間対話の特色を考察し、その成果と相互承認へ至る問題点を明確にしている。さらに、ヨーロッパにおけるルーテル教会、

改革派、合同教会の討議の結果としてまとめられた『ロイエンベルク協約』（1973）におけるバプテスマの相互承認の争点と合意点を明らかにしている。

第5章では、バプテスマを巡るエキュメニカルな課題について論じており、バプテスマの相互承認においてユーカリストの交わりの有無がその承認のレベルを決定していること、幼児バプテスマの容認が課題であることを論じている。

本論文を通じて、諸教会がバプテスマをめぐる討議および研究によってその相違を克服し、現在では様々な伝統を持つ教会がバプテスマの相互承認ができる段階に至った経緯が明解に論述されている。その上で、バプテスマの相互承認が行なわれても、教会によっては他教会で受洗した人すべてがユーカリストの交わりに招かれていないという現状や新しい解釈でバプテスマが執行されていることなど新たな問題点についても報告されている。

論文審査結果の要旨

本論文は、バプテスマの相互承認の課題を考察し、その争点と解決の糸口を明確にするという問題意識を持ち、その研究テーマに即した資料と先行研究が十分に渉猟されている。その資料の分析と対話が丁寧になされ、何が議論され、また、議論の結果、何が成果、ないし結論として得られているのかをまとめる方法は手堅い。それによって90年にわたるエキュメニカル運動で、バプテスマの何が合意されてきて、何が合意されないまま残っているかが明らかとなっている。

洗礼論については長い歴史の研究の積み重ねがあるが、本論文のテーマであるバプテスマの相互承認はキリスト教会、またエキュメニカル運動にとって重要であるにも関わらず先行研究が少ない。論者は WCC 本部に所蔵されている世界各地の異なった教派教会やそれらの神学部から寄せられた未公表応答文書等、可能な限りの一次資料にあたりつつ、世界教会協議会信仰職制委員会が2011年に『一つのバプテスマ』を発表するまでの約90年間に行ってきたバプテスマに関する討議やバプテスマの相互承認に至る道筋を鳥瞰させてくれている点は高く評価される。この点において本論文は今後の日本におけるエキュメニカルなバプテスマ理解とその相互承認に関する研究に資する研究であると言える。さらに、今までほとんど知られていなかったカトリック神学者たちによるエキュメニカル運動への貢献に光を当てて論じているのは、本論文の特筆すべき点である。

ただ、研究の課題も指摘しなければならない。まず、資料の紹介と分析を通して課題を整理し、問題点を明確にしている点は評価できるが、資料の背後にある神学議論、ことに、 sacrament の神学に基づく議論の解釈について、もう一步踏み込めていない感がある。カトリック教会には緻密な sacrament の神学があり、プロテスタントにもそれなりの神学的議論が存在しており、それらとの対話が十分になされていれば神学論文としていっそうの深みを有することとなったであろうし、論者の方法であるエキュメニカル解釈学の有効性を示すことともなったであろう。

また本研究テーマが持つ宣教論的な意義の議論についても課題が残っている。エキュメニカル運動とは、「すべての人を一つにしてください」（ヨハネ17：21）とのイエスの祈りを実現するために、まさに地球という家に共に住むすべての人々の和解と交わりを目指すものである。福音理解の違い、社会的・政治的な状況の違い、指導者に共鳴する集団的メンタリティの違い、そしてそれらによって生み出された軋轢と流血の歴史から目をそらすことなく、それぞれの教派で実践されているバプテスマを相互承認するための地道な歩みを提示することは、世界各地の紛争を終結させる糸口を提示することにもなり、人類の和解と交わりを目指す歩みに貢献することになる。バプテスマの相互承認が教会内の問題を超えて、社会的な意味を持つことをもう少し明確に論じるならば、さらに価値ある論文となるであろう。

また、そもそも「キリストにある一致」とは何であるのか、バプテスマをどのように理解し、相互承認の障壁を乗り越える理念と実践について論者自身が神学的に議論を深めているとは言えない。この点は上述の課題と相まって今後の論者の神学研究の展開にとって必要な論点である。

以上の批判点は、今後の研究課題として挙げられたもので、申請者は口頭試問において各審査委員からの指摘に応答し、課題として認識していることも示した。申請者には、今後とも研究を進め、より広い視野と知識の中で研究テーマを深めるよう期待するものである。

以上のような審査の結果、審査委員会は、請求論文は神学研究科の定める博士論文審査基準を満たしており、博士学位を授与されるに相応しいものと判断し、報告する。